

平成 18 年度 第 4 回河川工作物WG結果概要

1 日 時 平成 19 年 2 月 5 日（月） 14:00～17:30

2 場 所 羅臼町商工会館

3 出席者

（1）委員（五十音順、敬称略）

岡部 健士 徳島大学工学部教授

小宮山 英重 野生鮭研究所

妹尾 優二 流域生態研究所

中村 太士 北海道大学大学院農学研究科教授（座長）

丸谷 知己 北海道大学大学院農学研究科教授

（3）関係行政機関

斜里町、羅臼町

（4）漁業関係者

羅臼漁協、根室管内さけます増殖事業協会

（5）事務局

林野庁北海道森林管理局、環境省釧路自然環境事務所、北海道

4 議 題

（1）河川工作物影響評価結果の検討

○評価結果について

羅臼川の北海道が所管する砂防ダム 1 基、チエンベツ川の北海道が所管する治山ダム 2 基を「最優先的に改良の検討を行うことが適当」であり、それ以外の工作物は「当面の間は現状維持とすることが適当」とする事務局の提案どおり、ワーキンググループでの結論を得たが、以下のような意見があった。

（委員 A、座長）

シロザケ、カラフトマスについては、海と川との繋がりを持った改良という観点からは事務局案で了であるが、オショロコマのことを考えると、上流域での分断を解消すべきであり、「下流側が改良しないから上流側も改良しない」というのではなく区別して検討すべき。

（北海道、羅臼町）

工作物の改良に伴う下流側への影響、工作物の構造等から検討して改良困難なものもあるが、今後改良が必要となれば、予算面も含めて検討したい。

（森林管理局）

堆砂敷の温泉櫓、上流の巨礫の流出のことを考慮すると抜本的な改良は難しいが、下流の砂防ダムの改良を見据えながら、今後の対応を検討したい。

(2) 改良効果のモニタリングの検討

○モニタリング案について

遡上率を把握するための遡上数（工作物上下）、産卵状況を把握するための産卵床数、河床変化を把握するための従横断等のモニタリングを行い、改良効果の成否判断は、遡上率に基づき専門家の意見を踏まえて行うとする事務局提案について、以下のような意見があった。

(委員A)

- ・ルシャ川の場合、遡上量が多いカラフトマスは、遡上成功率を調査し約20%以上あれば改良成功と言える。また、遡上量が少ないシロザケについては、データ採取が可能かどうか考慮するとともに、遡上数が多い時期を見計らって行うことが必要なため、遡上成功率を出すのは難しいが、産卵床数、親魚数をベースにした一定の評価は可能。
- ・イワウベツ川のような親魚が確保できない河川では、人工的に放流し遡上率を出せるが魚のパニックを取り除くことが必要。

(委員B)

「上ろうと行動を起こしたら上れるようにする」ということから言えば50%位は上らせることが必要。

(委員C)

何%遡上ならば成功と基準を定めるのではなく、河川毎に防災上及び保全上の観点のバランスからフレキシブルに判断すべき。

(座長)

- ・生息域、個体数、産卵床数を調査することで、現状どこまで遡上しているのか、ある程度の評価は可能。
- ・合格点の基準はルシャ川のデータが一応の目安とはなるが、条件が河川毎に異なることから、専門家の意見を踏まえて評価することとする。

3 その他

○IUCNに対する回答について

(座長)

来年3月のIUCNの視察に対する河川工作物ワーキンググループの対応はどう考えているのか。報告書を出すことを考えているのか。

(事務局)

IUCNに対しては、説明書的なものは必要だが、報告書での回答は必要ないと考えており、今後事務局内で検討したい。